

はじめに

私は高校進学を機に地元を離れた。その理由はいくつあるが、1つは地元に残ったままでは将来に不安を感じたからである。大学進学や就職を考えた時、地元の高校では学力的にも入ってくる情報量的にも圧倒的に不利だと思った。両親が後押ししてくれたこともあり北広島高校に進学して、北海道教育大学旭川校へと入学し、今に至っている。

就職活動をするにあたり、私は地元へ帰ることを考えていなかった。特に帰る理由もなければ、帰りたいともそれほど思わなかったためである。しかし地元の友人と就職の話になった時に、今浦河で働いている同級生について聞くと、自分の想像以上にたくさんいたことに驚いた。確かに友人も家族もいるがそれ以外に残る理由が1つも見当たらず、「何故あえて何もない地元に残るのだろうか」、「都会に出たいと思わないのだろうか」など様々な疑問が生まれ、本論文を書くきっかけとなった。本論文では、若者が地方に留まる理由を明らかにし、今の若者がどのようにして現代を過ごしているかについて考察していく。

第1章では、一般的な若者論について論じ、現在の若者はどのような存在なのかを明らかにしていく。

第2章では、地元の浦河高校の進路のデータを見ながら卒業生の進路について述べる。

第3章では、聞き取りを行った方々の家庭環境について明らかにし、お互いどのように思っているのかについて考察する。

第4章では、友人関係について質問した結果から、現在の友人との関係や今後の付き合い方について考察していく。

第5章では、地元浦河についての聞き取りをもとに、地元に対しどのように思っているかを様々な視点から考察していく。

第6章では、高校卒業後4年間働いてきた彼らが自身の仕事についてどう思っているか読み解いていく。

第7章では、浦河での余暇の過ごし方という視点から地元に対する思いを考察していく。

第8章では、調査結果をもとに自分の将来や現在についてどのように考えているのか考察していく。

第 1 章 若者の一般論

1-1 さとり世代

現在 19～28 歳、大学生から入社 4 年目くらいまでの若者たちは「ゆとり世代」と呼ばれ、上の世代からは何を考えているのか分からないと言われ、元気や勢いがなく、何かを諦めているように見られることも多い。しかし「自分達は“ゆとり”ではなく、日本の現状を受け入れた“さとり世代”だ」という声がネット上で広まり、若者の共感を呼び話題となった。

原田曜平氏は現代の 20 代の特徴について、消費せず、お金にも執着せず、出世や金儲けといった上昇志向もそれほど強くない、恋愛にも消極的という点をとらえて「さとり世代」と称した。彼らは周りとの関係や仕事とプライベートのバランスなど、何事も「ちょうどよい」を目指している。周囲との協調性やバランスを重視し、また、競争意識の低さから「出世したい」、「起業したい」といった上昇志向を持つ人は少ない。しかし生まれたときから不景気の時代を生きてきて、その厳しさを肌で感じているため、働いて収入を得なければいけないことは分かっている。同時に仕事で夢や理想をかなえられる訳ではないとも考えているため、仕事はきちんとこなすが、プライベートでは自分にとって快適な生活を維持することも大事にしたいとも考えているのである。

協調性や人間関係に対する意識形成の背景に、ゆとり教育で協調性の有無が重視され、「KY」という言葉が流行語になったり、ソーシャルメディアが発展してきたりした時代を生きてきた「さとり世代」は、極度に“空気を読む”傾向がある。SNS の発展により、前世代よりも多様な人と繋がり、広く浅く様々なコミュニティに所属するようになった。そうすると、Twitter の複数アカウントや LINE のグループ作成によって自身のキャラクターを使い分け、空気を読むことが必要になった。あまり目立った行動を取ると、ネットトラブルやブログ炎上、LINE のグループから退会させられるなど“はぶき”に合う可能性が高く、これらの行為を目の当たりにしてきた結果、周囲に自身を合わせる技を身に付け、人間関係には驚くほど神経を使うこととなったのである。

図 1-1 Twitter 複数アカウント所有率及び平均個数

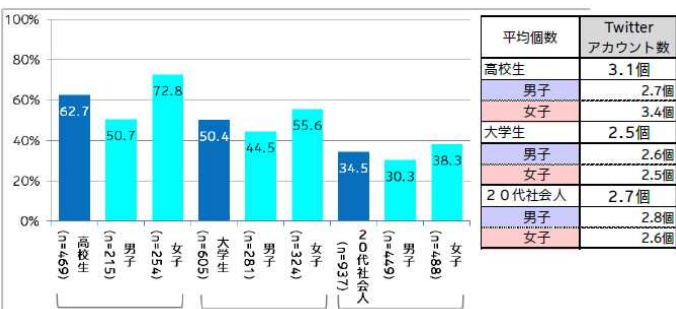


表 1-1 普段の生活で使うことのあるキャラの数

ふだんの生活で使うことのあるキャラの数

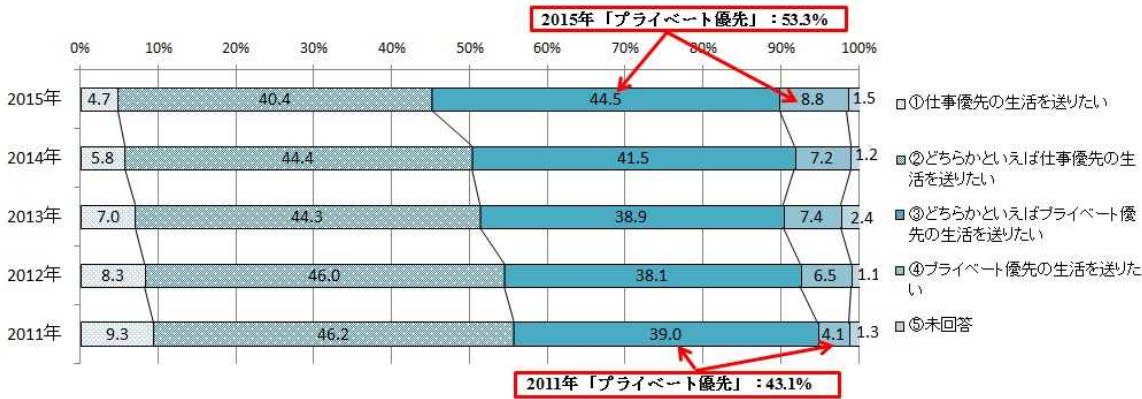
	高校生	大学生	20代社会人
	5.7キャラ	5.0キャラ	4.0キャラ
男子	4.9	4.2	3.2
女子	6.6	5.8	4.8

出所：株式会社電通 HP

出所：株式会社電通 HP

多くの若者は仕事とプライベートのバランスを考え、仕事はある程度こなしながらプライベートの充実を図りたいと思っている。マイナビの新入社員の意識調査によると、仕事よりもプライベートを優先したいと思う新入社員の割合が 5 割を超えたことが分かった。そのように思う割合は年々増え、2011 年はプライベート優先が 43.1%だったのに対し、2015 年は 53.3%に上った。またレジェンダ・コーポレーション株式会社が入社 4 年目までの若手社員に行った新入社員の残業に対する意識調査の結果、月間残業時間数は平均 36 時間であるが、理想的な時間数は平均 24 時間となり、実際の時間数とのギャップは 12 時間あることが分かった。1 人平均 1 時間程の残業をしている実態が明らかになり、41 時間以上の残業になった場合、残業量に対して不満が高まりワークライフバランスがとれていないと認識していることも分かった。

図 1-2 仕事とプライベートについて



出所：マイナビ HP

表 1-2 実際の月間残業時間数

	全体 割合	男性 割合	女性 割合
1～20時間	28.4%	20.4%	41.0%
21～40時間	28.0%	30.4%	24.3%
41～60時間	15.8%	19.3%	10.4%
61～80時間	7.9%	8.5%	6.9%
81～100時間	2.5%	3.7%	0.6%
101時間以上	2.5%	3.3%	1.2%
残業はしていない	7.7%	7.0%	8.7%
残業はできない	3.4%	2.2%	5.2%
裁量制労働のためわからない	3.8%	5.2%	1.7%

<注記>「101時間以上」:「101～150時間」および「151時間以上」の合計

出所：レジェンダグループ HP

表 1-3 理想的な残業時間

	全体 割合	男性 割合	女性 割合
1～20時間	38.6%	30.0%	52.0%
21～40時間	30.0%	37.0%	19.1%
41～60時間	7.4%	10.0%	3.5%
61～80時間	1.1%	1.5%	0.6%
81～100時間	0.9%	1.1%	0.6%
101時間以上	0.0%	0.0%	0.0%
残業がない	21.9%	20.4%	24.3%

<注記>「40時間以下」:「残業がない」、「1～20時間」および「21～40時間」の合計

出所：レジェンダグループ HP

消費することに対してさとり世代は慎重な態度を見せる。豪快にお金を使うバブル世代に対し、さとり世代は車やブランド物に興味を示さず、酒も飲まず、旅行やスポーツもしない。幼い頃から“物”は豊かな生活を送ってきたため、消費に対してガツガツせず「安くて、それなりに質の高いもの」で満足できてしまうことが特徴だ。上述した通り、不景気な時代を生きてきたため安定志向が強い。なので、バブル世代のようにブランド品を買い漁るような一度に多額のお金を使うことはせず、身分不相応な出費はしない。常にコストパフォーマンスを意識し、ネットで情報収集をしながら堅実に生活していくことがさとり世代の消費と言える。また、携帯電話やソーシャルメディアが発達したことによって多くの情報を簡単に手に入れることが出来るようになった。そうした情報に触れることで、見ていないものを見た気になる、食べていないものを食べたような気になる「既視感」が生まれてきた。自分が実際に体験しなくても、調べれば簡単に写真や動画、体験記がでてくるし、Facebook で友達が旅行に行った書き込みを見れば自分も行ったような気になるのである。こうしたネットからの情報だけで自分もした気になってしまう「既視感」によって若者の行動力や消費を削いでしまっているとも言われている。

図 1-3 マイカー所有率



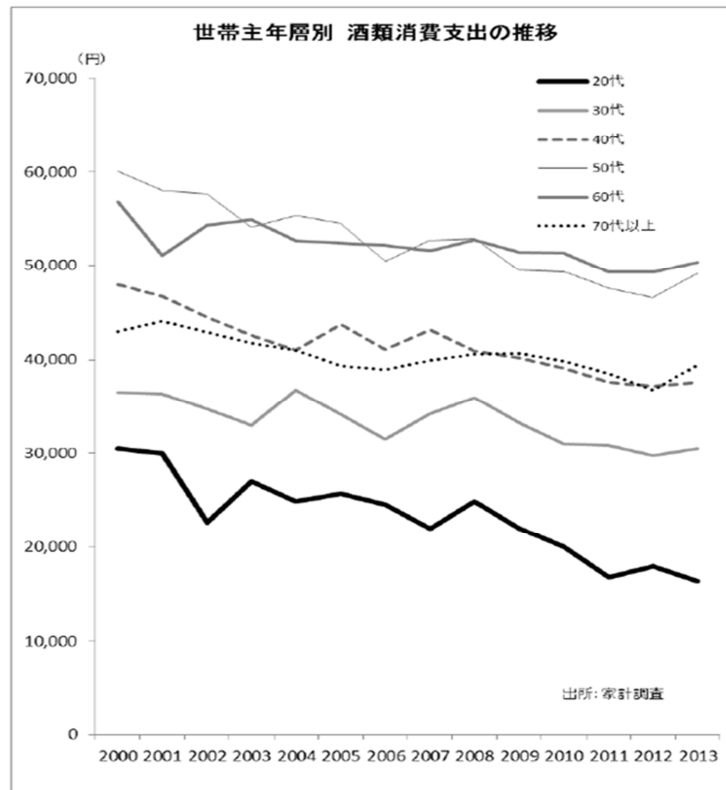
出所：ソニー損保 HP

表 1-4 性・年代別延べ宿泊旅行者数の推移

	04年度	05年度	06年度	07年度	08年度	09年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度
全国20～79歳男女	17,343	17,875	17,366	17,514	17,355	16,239	15,020	14,686	14,505	15,599	15,110
前年比	—	3.1%	▲2.8%	0.9%	▲0.9%	▲6.4%	▲7.5%	▲2.2%	▲1.2%	7.5%	▲3.1%
20～34歳 / 男性	2,219	2,201	2,036	2,075	1,975	1,879	1,612	1,608	1,450	1,537	1,553
前年比	—	▲0.9%	▲7.5%	1.9%	▲4.8%	▲4.9%	▲14.2%	▲0.2%	▲9.9%	6.0%	1.1%
20～34歳 / 女性	2,319	2,284	2,214	2,102	2,074	1,876	1,802	1,705	1,648	1,779	1,691
前年比	—	▲1.5%	▲3.1%	▲5.1%	▲1.4%	▲9.5%	▲3.9%	▲5.4%	▲3.4%	8.0%	▲4.9%
35～49歳 / 男性	2,045	2,175	1,833	2,106	2,084	2,069	1,888	1,902	1,864	2,038	2,028
前年比	—	6.3%	▲15.7%	14.9%	▲1.0%	▲0.7%	▲8.7%	0.7%	▲2.0%	9.3%	▲0.5%
35～49歳 / 女性	1,963	2,017	1,847	1,900	1,856	1,841	1,777	1,711	1,669	1,851	1,776
前年比	—	2.7%	▲8.4%	2.9%	▲2.3%	▲0.8%	▲3.5%	▲3.7%	▲2.5%	10.9%	▲4.0%
50～79歳 / 男性	3,959	4,472	4,424	4,310	4,414	3,946	3,578	3,601	3,543	3,941	3,795
前年比	—	13.0%	▲1.1%	▲2.6%	2.4%	▲10.6%	▲9.3%	0.7%	▲1.6%	11.2%	▲3.7%
50～79歳 / 女性	4,837	4,726	5,013	5,022	4,952	4,628	4,362	4,158	4,331	4,453	4,266
前年比	—	▲2.3%	6.1%	0.2%	▲1.4%	▲6.5%	▲5.7%	▲4.7%	4.2%	2.8%	▲4.2%

出所：じゃらんリサーチセンターHP

図 1-4 世帯主年層別 種類消費支出の推移



出所：酒文化研究所 HP

こうした「さとり世代」と呼ばれる若者が出てきた背景として、生まれたときから「平成不況」、学校に入学したら「ゆとり教育」、大学に入るころには「大学全入時代」、就活が始まれば「就職氷河期」、他にも東日本大震災やリーマンショックなど、様々なことが起こってきた。こうした社会環境の大きな変化から自分の身を守るために、過剰に世の中に期待をして振り回されないためのある種の处世術として、客観的に、さとしたような冷静沈着な態度をとるようになった。

また、上京志向が弱く、若者が地方へこもる理由を阿部真大は2014年の東洋経済新聞報社でのインタビューで、若者の周りの環境の変化によるものと述べている。これまでの若者は都会に憧れを抱いていたが、2000年代からショッピングモールが各地にできるようになった。大型ショッピングモールは買い物、食事、遊びの場として機能し、「ここで十分」と考える若者が増えていった。昔であれば「つまらない地方」と「刺激的な大都市」の2つしかなかったのが、今はその間に「ほどほどに快適な地方都市」ができた。地方の田舎は昔ながらの人間関係に縛られていて、若者にとっては息のつまる所であった。それが今は地方の開発によりしがらみのない田舎ができあがったのである。しがらみにない田舎での人間関係は友人と家族しかいなくなり、そこにイオンモール的な場所が加われば、地方都市がものすごく快適な場所となる。

しかし彼らも将来への不安を感じてない訳ではない。その背景には労働環境の悪さがある。彼らの労働環境は大変厳しく、賃金も低いため将来に対し希望を見いだせない若者も多い。彼らはそれでも仕事を続けるために、やりがいという精神的支えと親という経済的支えの上に仕事をしている状態なのである。労働環境も悪く、友達と家族しかいない人間関係の中で、将来の結婚や子育て、親の介護を考えた時、自分でやっていけるのか不安に感じている。

1-2 マイルドヤンキー

マイルドヤンキーとは、かつての特攻服を着てバイクを派手に乗り回していたヤンキーとは違い、見た目は普通のひとほとんど変わらず、ヤンキーから攻撃性などの激しさを除いたような性質で、東京などの都市に対する上京志向がなく、地元で強固な人間関係と生活基盤を構築し、地元からでたがらない若者達のことを指す。博報堂ブランドデザイン若者研究所の原田曜平氏が提唱しているもので、2014 年の流行語大賞の候補にも挙げられた。特徴として①「絆」「仲間」「家族」という言葉が好き、②地元（家から半径 5km）から出たくない、③車（特にミニバン）が好き④ショッピングモールが好き、⑤EXILE が好き、という傾向があるとされている。一般的に低収入とされるが、年の早いうちに結婚して子どもを産み育てるなど、次世代をスムーズに生み出すことができる層であるため、子どもの成長に伴う消費が期待できるとされている。また、親との同居や地方に住むことによって住居費の負担が少ないため、車やタバコ、酒などの嗜好品やブランド物など消費意欲は比較的高い。そのため企業や地元経済にとって有望な消費者として注目されており、研究対象とされている。

図 1-5 原田曜平氏



出所：TKC グループ HP

1-2-1 地元に対する考え方

マイルドヤンキーは「生まれ育った地元から出たいと思わない」、「一生地元で暮らしたい」など、上京志向がないことが一つの特徴である。生まれ育った地元で強い絆と生活の基盤を作っていく、そこからあまり離れようとは思わない。彼らの地元から離れたくないという意識は、ひとつには日本の経済の停滞が背景にあると考えられている。非正規雇用の割合が高くなり都会に行ったところで良い職や生活を送れるとは限らず、将来への希望を持ちにくい状況で、あえて高い目標を設定する必要はなく、多少賃金が低くても物価の安く、周りとの関係性も濃い地元で暮らした方が生活も充実しやすいと考えている。また、マイルドヤンキー達の地元愛を構成する要素は、1 つ目は、パラサイト（寄生）できる家、親がいること。その背景として、一昔前の世代と比べて親とずいぶん仲がいい若者が多く

なっている。2つ目が、中学時代の友人である。彼らは中学からケータイを持ち始めて、いまでいえばLINEでつながっていて、twitterやFacebookなどのSNSをはじめとしたソーシャルメディアの普及によって、学校から家に帰っても仲間と連絡を取り合っている。情報とコミュニケーションの量は昔に比べて格段に多く、それが地元出身の「絆」を深めている。3つ目が、イオンなどの大型ショッピングモールである。近くのショッピングモールに行けば欲しいものは大方揃い、一日中時間がつぶせるため友達と集まってたまり場として過ごすことが定番となっている。また、かつては東京でしか得られない情報や体験、商品があったが、現代ではインターネットを通じてほとんどの情報や商品を手に入れることができるようになり、2000年代からはショッピングモールが各地にできるようになり、全国どこでも同じようなライフスタイルを送れるようになった。そのためわざわざ東京にでる必要もなくなったという見方もある。

1-2-2 仕事観

マイルドヤンキーには上京志向がないことは上記の通りだが、それは彼らの仕事観とも大きく関係している。

彼らはあまり都会に出て行こうとしないのは、都会に出て競争社会に身を投じ、キャリアアップはできるものの仕事や人間関係に苦勞するよりも、あえてその競争には参加せず親と仲の良い友達と慣れ親しんだ地元で、暮らせる程度に稼ぎながらゆっくり生活ができることの方が彼らにとっては魅力的だからである。一般に彼らの選択は自分の可能性を狭めていくと言われるが、今の社会状況を見たときに冷静に現実的に将来を考えると出来るだけリスクの軽減を考えた彼らの選択は賢いとも言える。

また、特に女性は将来について現実的に考えている。マイルドヤンキーには早くに結婚したり早期出産をしたりする人が多い。その理由については住んでいるところに娯楽が少ないからなどと言われてきたが、その本音は経済的理由によるものが多い。結婚すれば単純に考えて収入は倍になり、生活をしながら子どもを育てていく環境を整えやすくなるうえ、子どもを産んで働くことを考えると体力のある若いうちが良いと考えている。また、彼女らには専業主婦になって家庭に入るという考えがない。それは、夫の収入だけでは生活できないという理由もあるが、一番はリスクの回避である。夫に何かあった時や離婚になった時、自分だけでは経済的にも体力的にも子育てはできない。そのため夫に依存せず収入も安定させるために自分も仕事に就き、非正規雇用であれば複数掛け持ちをしてさらにリスクを分散させているのである。結婚・出産前は正社員でも、正社員では保険代や福利厚生代として様々なものが給与から引かれていくうえ、勤務時間外での出勤もあるので他にアルバイトなどをする暇がない。だとすれば、払った分だけ返ってくるか分からない年金を払うよりも初めからバイトをいくつか掛け持ちした方が手元に残るお金が大きいいため、産後は非正規雇用を考える女性も多い。

1-2-3 結婚・出産観

早期結婚・出産の1つの目安として、「20代前半のうちに第1子を生む」ということが挙げられる。それは体力のあるうちに産みたいということもあるが、それだけではなく「産み遅れない」ためにするのが最大の理由のようである。1人で仕事をしながら育てていくことは困難なため、同世代の友達や先輩など周りのママ達と協力して一緒に子育てすることでベビーカーやチャイルドシート、余ったおむつなど必要なものを使いまわすことができるのでお金がかからず、お互い同じような歳の子どもがいるため一緒にいる時にも気を遣わなくてすむのである。

そのため彼女らが都会にでることを消極的な理由の1つとして婚期が遅れるということが挙げられる。都会でキャリアウーマンとして働くことは結婚が遅れることに繋がり、「産み遅れ」へと繋がっていく。それならば地元に残れば若い男女は少ないため結婚できる可能性が上がり、すぐに共働きになれば収入も増える。また女性は年を取るほどまともな仕事はなくなり、給料も少なくなっていく。だからこそお金はなくても体力のあるうちに子どもを生むことで、周りの同世代と一緒に協力して子育てをしたいと思っている。そのためには産み遅れる訳にはいかないのである。彼女たちにとっては仕事も結婚も生活の安定のためというのが1つ大きな感覚としてあるため結婚・出産願望は非常に強いと言える。

1-2-4 消費者としてのマイルドヤンキー

最近マイルドヤンキーが新たな消費層として様々な業界の企業や地域から注目されている。マイルドヤンキーは20代だけでも約30%いると言われており、他の10代、30代も含めた日本にいる若者の高い割合がマイルドヤンキーと呼ばれる性質も持つ。彼らは酒、たばこ、パチンコ、服、車、バイクなど娯楽や嗜好品にお金をかける傾向があり、なかには車やバイクの改造に何百万もかける人もいるのである。そのためマイルドヤン

図 1-6 地元愛に目を付けて開発した商品



出所：NHK ONLINE

キーに向けた商品開発や店舗展開が進んでいる。例えばコンビニ最大手のセブン&アイは飽和状態の都心から離れ、地方での出店に力を入れている。ドン・キホーテはファミリー向けの店舗、MEGA ドンキを郊外に展開するなどマイルドヤンキー層に向けた出店戦略を行っている。また八王子店では地元愛に着目した商品開発したところ売り上げが40%近くアップし、今や埼玉県や千葉県のお店でもこのようなご当地グッズの開発・販売が広がっている。また大手自動車メーカーのHONDAはマイルドヤンキーに人気のゆったり乗れるミニバンなどの車の開発を積極的に行っており、カラーやパーツ、車の形など若者を意識している。

また、一般的にマイルドヤンキーは結婚・出産・育児という流れがスムーズで、子どもにお金をかける傾向があるため、彼らの出産や成長による消費や娯楽や嗜好品に対する消費が地域経済を活性化するとされている。また若い働き手としても地元へ貢献しており、地域の活性化には欠かせない存在として見られている。最近ではまちおこしにも深く関係している。千葉県木更津市はヤンキーでまちおこしを行っていて、「木更津といえばヤンキーの街」というイメージを逆手に、木更津発

のご当地アイドルユニット「C-Style」を日本初の「ヤンキー系アイドル」として売り出している。地元の NPO 法人である木更津駅周辺地域活性化推進協議会がプロデュースしており、音楽活動を中心に 2013 年から活動している。ライブやイベントを通して木更津を全国へと発信している。

しかし最近では地元に残りたくても仕事がなく出ていかざる得ない若者も多くなっている。介護職などあることはあるが都会に比べ圧倒的に企業数が少ない。そのため若者に地元に残って暮らしてもらうためにはしっかりと雇用をつくっていかないといけない、という課題がある。

図 1-7 C-Style



出所：C-Style OFFICIAL SITE

1-2-5 マイルドヤンキーのこれから

マイルドヤンキーのこれからについて、原田氏は大きく 2 つの見方を述べている。1 つは、「日本だけではなくアジアでも広くマイルドヤンキーが広がっていく」という見方である。どこの国でも先進国になれば一定割合でマイルドヤンキーが出現している。同様の現象は 80 年代後半のアメリカでもあった。日本では今、ようやく 80 年代後半の成熟期だった西欧社会に意識が追いついてきたところであり、今後アジア各国でも先進国化が進めば、マイルドヤンキーがアジアの若者の一定数を占めると予測している。

もう 1 つの見方は、「マイルドヤンキーは今だけの暫定的なものにすぎず、今後も存在し続けるかは不確定なものにすぎない」というものである。その背景として、彼らが親になった時の経済事情が悪化しているという可能性がある。マイルドヤンキーの親はバブル世代から新人類で最後の正社員世代であるため、正社員率が高いが、その下の団塊ジュニア世代から下になると親の非正規雇用率が一段と高くなる。そのため団塊ジュニア（マイルドヤンキー）を親にもつ子ども達はパラサイトする家もなく、経済状況が大変厳しくなると予想される。

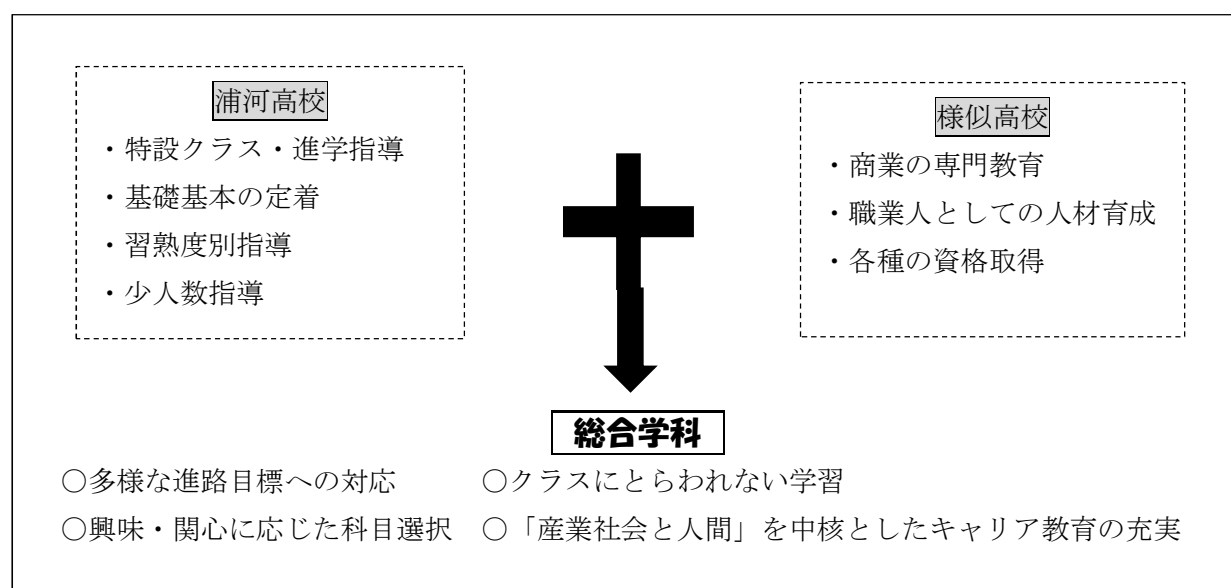
第2章 浦河高校

2-1 浦河高校

北海道浦河高等学校は1932年6月に町立浦河高等女学校として開校した。1948年に共学となった後、普通科、水産科、工業科を設置したが1994年からは普通科のみとなっている。1949年に三石町（現新ひだか町）、様似町、幌泉町（現えりも町）に分校を設置しているが、各分校は1952年に現在の三石高等学校（1976年3月閉校）、様似高等学校、えりも高等学校として独立した。2012年に隣町の様似高校との再編統合によって日高管内で唯一の総合学科高校となった。人文科学系、自然科学系、情報・ビジネス系、健康・生活系、地域・文化系の科目から自分の希望する進路にあった科目を選択することができ、地域を素材とした選択科目や商業・情報系や福祉関連の資格取得可能な選択科目の設置もされている。2013年には創立80周年を迎えた。

主に町内の中学校3校から来る生徒が中心だが、日高管内の高校の中でも比較的成績が良いため、周辺の町からも集まる。部活動も盛んで、多くの部活・同好会が全道、全国大会に出場している。浦河町は馬で有名ということもあって道内の高校では珍しい馬術部があり、5年連続全国大会に出場するなど力を入れて取り組んでいる。

図 2-1 浦河高校統合図



出所：浦河高校 HP より筆者作成

2-2 浦河高校の進路

浦河高校の進路のデータを見ると、年度によって比率は大きく変わるものの、半数以上は進学である。進学先としては専門学校が一番多く、簿記や各種事務の他に保育や介護、美容、情報、調理など多岐にわたっている。次いで私立、国公立、短期大学となっているが、ほとんどが道内大学で、特に私立大学は札幌大学、北海学園大学、文教大学など札幌周辺に集中している。また、浦河町には赤十字看護専門学校があるため、毎年看護師を目指す生徒が数人入学する。

就職は民間企業が多く、道内企業ではカラカミ観光や野口観光、第一滝本館などの観光業が多い傾向が見られる。他にはコープさっぽろやノーザンファームなど様々な職種の会社があり、年度によって大きく変わるようである。管内は浦河を中心にした近隣の町がほとんどで、管内の中でも安定した就職先である銀行や郵便局、農協、漁協の他に、浦河は老後施設や介護施設などが多いため福祉関連施設への就職も多い。ここ数年は毎年 30 人前後の生徒が管内に就職している。公務員は正規採用と臨時採用共に町役場、日高振興局、消防、自衛隊が主となっている。表より、就職する生徒数は年によって変動するが、どの年においても過半数は管内に残っていることが分かる。

表 2-1 浦河高校の就職先

	2014 年度			2013 年度			2012 年度			2011 年度		
	管内	道内	道外	管内	道内	道外	管内	道内	道外	管内	道内	道外
男子	—	—	—	—	—	—	13	5	0	22	7	0
女子	—	—	—	—	—	—	12	7	0	23	9	1
小計	45	25		27	13		25	12		45	17	
合計	67			39			37			62		

	2010 年度			2009 年度			2008 年度		
	管内	道内	道外	管内	道内	道外	管内	道内	道外
男子	11	3	0	9	12	1	13	2	1
女子	11	5	0	18	5	0	17	2	1
小計	22	8		27	18		30	6	
合計	30			45			36		

出所：浦河高校 HP より筆者作成

これらのデータから浦河の「マイルドヤンキー層」を形成しているのは主に高卒の若者だと考えられる。表 2-1 からは就職する生徒の半数以上は浦河を中心とする管内に就職することが分かった。その数は毎年一定数以上おり、「地元に残る若者」がここから来ていることが分かる。第 3 章ではそんな地元に残る同世代の若者に様々なことについてどのように考えているのか聞き取り調査を行った。

第3章 家庭環境

親が子どもに与える影響は多大であり、子どもの考え方や価値観は育った環境によって形成される。そのため地元の残る若者に聞き取りを行ったところ、地元志向には「親と一緒に住みたい」、「親が近くにいるから」など「親」が1つの大きな理由としてあることが分かった。

本章では、地元の残る人はどのような家庭環境にあり、家族についてどう思っているのかを聞き取り調査をもとに明らかにしていく。聞き取り調査に協力して頂いた方々の基本情報と質問項目は以下の通りである。なお、項目2「収入はどれくらいか」について、ほとんど回答を得られなかったため割愛する。

表 3-1 聞き取りに協力して頂いた方々の基本情報

名前	年齢	性別	職業
A	22	女性	事務職（育休中）
B	22	女性	銀行
C	22	女性	看護師
D	22	男性	運送業
E	22	男性	公務員
F	22	男性	販売員
G	24	女性	公務員
H	22	女性	学生（就職先は銀行）

出所：筆者作成

表 3-2 聞き取り調査における質問項目

項目	質問内容
1	親の職業はなにか
2	収入はどれくらいか
3	親との関係は良いか
4	家族に対し不安、不満はあるか
5	地元に残ることについて親から何か言われたことがあるか

出所：筆者作成

3-1 親の職業

親の職業について質問したところ、農家と共働きの 2 つに分かれた。共働きと答えた人のほとんどが母親はパートで父親が公務員や土木系と答えており、中には複数のパートを掛け持ちしている母親もいた。

3-2 親との関係

親との関係はどの人もおおむね良好で、特に悪いという回答は得られなかった。親との関係について「仲良しだね！喧嘩もないし、ママが平日休みとかよく買い物いたりするし！なんでも言える！」(A さん) と、とても良好というふうに答えてくれたのは A さんのみであったが、昔は色々ともめたものの今は仲が良いという人がほとんどだった。

3-3 家族に対する不安・不満

項目 4「家族に対し不安、不満はあるか」について、一人暮らしをする主な理由の 1 つとして、「親と一緒に暮らすと自分の生活に対し色々言われるから」ということが考えられるが、それは家族に対する不満の 1 つである。しかし地元に残った人のほとんどが実家暮らしであり、そのような不満はないのか、それらの不満が町を出るという選択肢へ繋がらなかったのか、また、家族の現在や将来についてどんな不安があるのかを聞くためこのような質問をした。

結果は、2 人ほど少し不満を持つという人がいたがそれ以外の人は特になく、「むしろ感謝」という言葉も出た。関係は良好であるが、なにかしらの不満・不安はあると予想していたために、このような結果に少し驚いた。私の周りの友人に話を聞くと、「一人暮らしをしてたから、多分もう実家暮らしはできない。きっと喧嘩してしまう」と言う。大学では、自分のライフスタイルに対し文句を言ってくる人もおらず思うままに自由に過ごしてきたため、実家に帰って色々言われることが耐えられないのである。あるいは一人暮らしをすることで家事をこなしながら日々の生活を送ることの大変さを覚え、むしろ実家で暮らした方が家事の負担が減ると考えるかのどちらかである。そのため一度一人暮らしを経験すると一人暮らしをしたい人と実家に暮らしたい人と分かれると思うが、今回聞き取りを行った人は 1 人を除く全ての人が高校卒業後そのまま地元就職した人である。ずっと親と一緒に暮らしているため、私たちが不満に思うようなこともそれが当たり前のようになり、特に不満とも感じていないのだと考える。就職後も家族と暮らすということはごく普通の流れであり、これまでと何も変わらないため特別不満が生まれることもないのだと考えられる。家族に対する不安も挙げられなかった。

3-4 地元に残ることに対する親の意識

項目 5「地元に残ることについて親から何か言われたことがあるか」について、子どもが地元に残ることに対しどのように思っているのかを直接両親に聞くことは困難なため、こ

のような形で聞くことで少しでも考えを読み取ろうと思い質問をした。結果としては、聞き取りを行った人全員が地元に残ることに対し反対はされておらず、「特に何も言われなかった」(C・D・Fさん)、「むしろ歓迎された/勧められた」(A・B・G・Hさん)という回答が得られた。どのような理由で地元に残ることに賛成・反対するかを深く読み取することはできなかったが、地元に残る分には経済的にも楽であるし、お互い何かあった時にすぐに対応することができるため特に反対する理由もないのだと考えている。また、今は大学に入ったからと言って必ずしも良い職に就ける訳ではなく、職に就くこと自体が大変な時代である。それならば様々なリスクを抱えて子どもを外に送り出すよりそのまま地元就職してもらえた方がありがたいという見方も考えられる。しかし逆に「専門学校行きたかったんじゃないの? いいの?」と聞かれたという回答もあり、子どもの将来や自分達の現状などをすべて考えた時、何を優先するのか、大切にするのかによって子どもが地元に残ることに對する親の考えは変わるのでないかと思う。

3-5 小括

本章では家族関係・家庭環境について見てきた。聞き取りを行った結果、学生の頃は反抗期などがあったが、現在は家族との関係は良好であり、不満や不安も特にないという結果が得られた。長い間一緒にいすぎて不満を不満と思わないような状態になっているのだと考えられる。良いことも悪いこともそれが当たり前のものとして見ているため、これまで多少くらい嫌だなど思うことがあったとしても、一緒に暮らしていく中で順応あるいは妥協して今日に至っているのだと思われる。

自分の子どもが地元に残ることに対し反対する親はいなかった。むしろ歓迎される人も複数いた。これだけの質問ではその理由までは明らかにすることはできないが、外に出ることで抱えるリスク(就職や経済面など)を、地元に残ることで回避できるのであれば、地元に残ることに反対しないのは当然の考えであり、残ってもらったほうが寂しくないし経済的にも助かるのだと考えられる。

第4章 友人関係

浦河町内の友人関係はほとんどが小学校・中学校という幼い頃からのものであり、幼稚園から高校まで一緒ということも決して珍しいことではない。進路を考え始める中・高生にとって小さい頃から一緒に過ごしてきた友人の存在は大きく、友人関係を考察することで地元志向との繋がりを考える。

本章では、友人に対する考え方を聞き取り調査で得られた回答を基に考察していく。質問項目は以下の通りである。

表 4-1 聞き取り調査における質問項目

項目	質問内容
1	友人関係は良いか
2	現在の友人はいつからの付き合いか
3	人から友達が少ないと思われることに抵抗があるか
4	友人は趣味や関心が同じ人が多いか、それらが異なっても付き合いたいと思うか

出所：筆者作成

4-1 友人との関係

地元という狭い世界において友人関係が上手くいかないということは、そこで暮らす上で大きな痛手となることは必至である。地元で暮らすことの良し悪しの半分ほどは友人関係に起因すると言っても過言ではないくらい大切な要素である。

聞き取りの結果、友人との関係は全員良いと回答し、小さい頃からの友人はもちろん高校卒業後からの友人との関係も良好で、特に何か問題があるといったような様子は見受けられなかった。これは幼稚園・小学校から一緒に過ごす中でお互いの性格や行動パターン、趣味、興味関心のあることを把握していくため自然と付き合う人が選択されていく結果であると考えられる。その選択は比較的早くからなされ、それからずっと一緒にいるため小さい頃からの友人とも今日まで良好な関係を築いていると考えられる。

4-2 友人との付き合い

付き合いのある友人はやはり小学校からの付き合いという回答が多く、次いで高校からという答えが多かった。小学校・高校からの友人が多いのは、小学校に入学すると少なくとも4つの幼稚園・保育所、高校では3つの中学校から人が集まるため、多くの人と出会う機会ができて友人関係も広がっていったと考えられる。

4-3 友人が少ないことへの抵抗感

若者が地元に残る理由に、地元にいればこれまで自分が築いてきた地位や人間関係があるため孤立することはない、ということが挙げられる。友達の数やどんな人と付き合いがあるのかは一種のステータスとして見られ、自分に対するイメージにも繋がるのである。これは特に中高生の頃に派手だった、やんちゃだったと言われるような人に多いように思える。

聞き取りからはほとんどの人が抵抗はないという回答だったが、友達が少ないとイメージダウンしてしまう気がするため、抵抗があると答えた人もいた。自分の職場のイメージや周りからの評価、世間体などもあって、「友達が少ない＝コミュニケーションが苦手な人」と思われたくないようである。職業柄多くの町民と関わっていかなければならないため、そのような「周りからの目」を気にするようであった。

4-4 友人関係の広がり

項目 4「友人は趣味や関心と同じ人が多いか、それらが異なっても付き合いたいと思うか」について、今の友人は自分と趣味や興味関心と同じ人が多く、それらが異なっても付き合いたいという回答が全員から挙げられた。「友達は趣味や関心と同じ人も違う人もいますし、新しい知識とか興味が沸くので異なっても付き合いたいですし今現在もいます！」(F さん)、「興味関心が異なっていること自体が、自分にないところでその人の魅力的な部分だと思うから（異なっても付き合いたい）」(H さん) 現在の友人は自分と似た考えを持つ人が多いが、色々な人と付き合うことで自分の視野を広げたいという思いが見られた。興味関心が自分と異なることは大きな問題ではなく、一緒にいて楽しいかどうかが重要であることがわかった。

4-5 小括

現在の友人は小学校あるいは高校からの付き合いという人が多く、いずれも関係は良好であることが分かった。これは、小学校でも高校でも入学を機に自分の周りの環境が大きく変わることによって新しい人と会う機会が増え、結果としてこの頃からの友人が増えたのではないかと考えられる。中学校からの友人という回答もあったが少ないのは、浦河では中学校は小学校そのまま持ち上がりがほとんどで、あっても 2 つの小学校から集まるくらいである。しかしスポーツ少年団やイベントなどで中学校入学前から交流があるため、中学校で一緒になってもすでに知っている人が多く、そもそも学年の半分は小学校からの付き合いの人であるため、今までの人間関係と大きく変わらない、という状況が理由として考えられる。また、友人と付き合う上で大切なのは自分と興味関心が同じということではなく、一緒にいて楽しいかどうかと考えていることが分かった。周りからの目が気になる時もあるが、自分の視野を広げてくれる存在としてこれからも付き合っていきたいと思っていると分かった。

第5章 地元に対する意識

地元の魅力や何故町へ残ったのかなど、地元に対する思いや印象について聞き取りを行った。筆者の予想では「地元には残っているものの、町に対してはそれほど良いとは思っていない」という回答が多いのではないかと考えていたが、お店がないなど不便なところはあるが、慣れ親しんだ場所なので浦河のことは好きであるという様子が見受けられた。

本章では、地元に残った人が地元に対しどのように思っているかについて明らかにしていく。質問項目は以下の通りである。

表 5-1 聞き取り調査における質問項目

項目	質問内容
1	なぜ地元に残ろうと思ったのか
2	地元の良い点はなにか
3	地元の悪い点はなにか
4	地元が好きか嫌いかと聞かれたらどう答えるか
5	地元に住み続けたいと思うか
6	地元を離れてみたいと思うか
7	田舎や都市など、そのような場所で暮らすのが理想的か →その理由/今住んでいる所はどうか
8	地元の魅力はなにか
9	地元には若者にとって魅力的な仕事があると思うか →ある：どんな仕事か ない：魅力的な仕事は何か

出所：筆者作成

5-1 浦河に残った理由

項目1「なぜ地元に残ろうと思ったのか」について、この質問は聞き取りをしていく上で一番聞きたかった質問である。筆者は高校から地元を離れたが、それは地元の高校に進学することでその後の将来に不安があり、高校卒業後に地元就職を考えても仕事がないと思ったことが1つの理由としてある。高校は地元に残るというのは分かるが、就職を浦河でする理由は以前から疑問であった。

聞き取りをしたところ、地元に残る理由はそれぞれ違っていた。「姉が専門学校へ行っていたため、なんとなく自分は親のところに残ろうと思った。姉の学校にかなりお金がかかったのも分かったから自分は地元で就職しようと決めた」(Aさん)、「やりたいことがなかったのが一番の理由です。あとは親がいるから。兄妹で残っているのは私だけだから、なんかあったら近くにいた方がすぐに行けるからです」(Bさん)、「浦河でやりたいことがあるからです。町を元気にしたいと思ってるから」(Fさん)「自分が生まれ育った場所だから

ら。今の自分があるのもこの町があるから」(Gさん)などの回答を得ることが出来た。

特に印象的だったのは「町のために何かしたい」、「親がいるため自分も残ろうと思った」という回答である。前者の回答が印象的だったのはこのようなことを思っ地元に残る人がいたのかという純粋な驚きからである。筆者も地元のことは嫌いではないがそのように思ったことはあまりなかった。答えたFさんとGさんはそれぞれ販売員と公務員であるが、Fさんは趣味の音楽を通じて町を盛り上げ、Gさんは公務員として町や町民のために頑張っていきたいという違う方向から町に対し貢献したいと考えていることが分かった。

後者の回答はでることは予想したが、その理由は考えていたものとまったく違った。筆者は「親と暮らすと家事の負担が減り、出費も抑えられるから」だと考えていた。もちろんそう思っているところもあるかもしれないが、彼女たちが言ったのは自分が地元を離れると子どもが誰も家にいなくなる、何かあった時にすぐに行くことができないということである。彼女たちにとって自分の進路を考える時に親のことも考慮することは当たり前のことであり、しかもそれが十分な理由としてなり得るのである。

どちらの回答からも「町と町の人のために、親のために」と自分ではなく他の誰かのためにという目的を持って地元に残っているという様子が見受けられた。

またHさんは筆者と同様に高校から町を出て、高校・大学と札幌で過ごしてきた。春からは浦河に戻り銀行に勤める。Hさんは浦河に戻る理由を「志望していた業種の企業が地元にあり、加えて実家から通えることにより交通費や家賃などの出費が抑えられるため」と述べている。彼女は仕事に対する自分の希望と、お金や住む場所などの条件が合致したため地元へ帰ってくることになったが、おそらく「自分の志望していた業種の企業が地元にあった」ことが一番の理由だと考えられる。項目9の「地元には若者にとって魅力的な仕事があると思うか」という質問に対して彼女は「あるが少ない。種類も限られてくるし、採用人数もかなり少ないから結局若者は都会に出ていくと思う。また、皆がみんなそういう割とお堅い業種(信金、役場、農協など)になりたい訳じゃなくて、もっと接客をやりたい人の就職先がないと思う」と回答した。自分はたまたま希望するものがあつたが、そうでなければ特に戻る理由もないのである。筆者がそう思う理由はいくつかあるが、それは彼女の地元に対する考え方を聞いた結果である。彼女の考え方についてはこれからまた取り上げていきたいと思う。

5-2 浦河の良い点

浦河の良い点で一番多く挙げられたのは「自然が豊か」ということである。浦河町は太平洋と日高山脈に挟まれた町で、競走馬の生産・育成が盛んな地域のため馬が放牧されている風景は町の至る所で見ることができる。そのため「馬産地であるからこそ乗馬体験を子どものうちにできる」、「海産・農産物が美味しい」、「いろんな種類の鳥を間近でバードウォッチングできる北海道でも珍しい場所」などという回答が得られた。

また、田舎にはよく見られる光景であると思うが「近所付き合いが盛んで、人情味があ

り皆が知り合いという雰囲気」も良い点として挙げられていた。それを感じられる場面として B さんは「(良い意味で) 知らない人も巻き込んで話始めたりとか、清掃活動してたら声かけてくれたり差し入れくれたりするとこかな」と述べている。近所付き合いや地域社会での人間関係の希薄化が進む現代においてこのような良い点が出てくるといことは誇るべき点であり、人が良いということを知っているから地元に残ることにも抵抗がないのだと考えられる

5-3 浦河の悪い点

先述した良い点で「皆が知り合いという雰囲気」と挙げたが、皆が知り合いという感じであるが故に「噂がすぐにまわる」という点が悪い点として挙げられた。町の規模はそれほど大きくない上にほとんどの人が昔から浦河に住んでいる人である。「△△(勤め先)の〇〇さん」といえば大体人物を特定することができ、さらにその家族についても知っている場合が多い。皆が何かしらの形で繋がっているため何かあればすぐに広まるし、人から人への伝達スピードが速いのだと考えられる。

第 7 章の余暇についてとも関係してくるが、遊ぶ場所・店、買い物できる店がないとの声も多数挙げられた。確かにショッピングビルと呼ばれるようなものはなく、遊ぶところも飲み屋もあるとは言えない。学生の頃はそれでも遊べていたが、社会人になり車や自由に使えるお金を手にした今、このような不満がでてくるのは当然のことのように思える。高校・大学を札幌で過ごしてきた H さんからは「居酒屋とか特にそうなんだけど、身内感が強すぎて一旦浦河離れて何年か暮らした者にとっては気軽に立ち寄れない。加えて、まず若者が気軽に入れるようなお店やチェーン店が僅かしかない」という回答を得られた。これは筆者も感じるところであり、地元に戻って友達とご飯を食べに行こうと思うと、まったく店が分からないためにしばしば困ることがある。個人経営の小さいお店で、常連や職場の飲み会で使うため店の人とは顔見知りという客がいるような店が多いのである。チェーン店であれば多少有名ではなくても気軽に入れるのに、個人経営の店だと町民ではあるのになんとなくアウェイな雰囲気を感じながら食事をしなければいけないのである。

また、「公共交通機関がとても少ない」(G さん)という回答も得られた。現在 JR 日高線は 2015 年 1 月に発生した高波による線路被害で鵠川～様似間が終日運休となっている。代わりにバス代行を行っているが 1 日 6～7 本と決して多くはない。電車自体もそれほど本数は走っていなかったが、元々少なかった公共交通機関が更に少なくなり、少し遠出をすることも難しくなった。また町内バスの本数も少ないため、車がないと移動には不便である。

図 5-1 日高線運休区間



出所：Response 鉄道 HP

5-4 浦河が好きか嫌いか

項目4「地元が好きか嫌いかと聞かれたらどう答えるか」について、概ねの人は好きと答えた。その理由としては、自然もあって人も優しく親も友人もいるため、そしてなにより慣れ親しんだ町だから、というものだった。「好き！！なによりずっといるから住みやすいって感じ！友達も親もいるし離れたくはないかな！」(Aさん)、「好きですとても。人情味が溢れててみんな優しいから。環境とかも過ごしやすいから」(Fさん)というような回答が得られた。多少の不便はあるが、それに勝るくらい好きだと思えることが彼らにはあることが分かった。

しかし一方で「好きではない」という回答もでた。「どちらかという嫌い。友達とかと集まれる所がない。楽しめる場所がない」(Dさん)、「好きでもない。札幌に慣れ過ぎて、住んでて不便に感じる」(Hさん)という声が上がリ、やはり不便であること、遊べる場所がないことが理由であった。好き嫌いの理由は人それぞれであるが、その人にとって何が大切なのか、どのようなことに重きを置いているのかによって同じ町でも視点が変わり、見えてくるものも変わってくるのだと考えられる。

5-5 地元に住み続けること

今回聞き取りを行ったのは学校卒業後地元就職した人達であるため、ずっと浦河で暮らしている。そこで仕事に就いてしまえば基本的にはそこに住み続けることになるが、浦河にずっと住み続けることについて聞いてみた。

結果は、住みたいという回答が多かった。これまでの質問の回答とも関係するが、「やはり慣れ親しんでいるから」というのが理由であった。ずっと暮らしてきて、居心地が良いと感じているのでそこからわざわざ出る理由もないという様子が見受けられた。ただし、一度も町の外へ出たことがないため「住み続けるが、一度は出てみたいとも思う」という声もでている。浦河町という狭い中にしかいたことがないため、色んな経験をしたり視野を広げるためにも出てみたかったという思いもあるようである。

住みたいとは思わないという回答もでたが、「浦河は不便。何かするにも静内やら苫小牧やら・・・」(Dさん)と、田舎であるために買い物や遊びに行こうと思うと少し遠出をしなければいけないところに不便さを感じているようであった。

5-6 地元を離れること

質問項目6「地元を離れてみたいと思うか」について、項目5で住みたいという回答が多かったため、この質問に対しては離れてみたいとは思わないという回答が多かった。今はあまり思わないが過去にはあったという回答も得られた。高校の時には専門学校への進学も考えて、都会に出れば遊ぶところも買い物するところもあり、バイトして好きなことしたいという思いはあったようである。しかし結果として浦河に残ることに不満はなく、むしろ高校時代のその考えは「都会に進学＝遊ぶ」であったと振り返っている。

浦河を離れてみたいと思う人が 1 人いたが、それはやはり不便であるし、一度家族から離れて暮らしてみたいという思いからのようである。

5-7 理想的なまち

質問項目 7「田舎や都市など、そのような場所で暮らすのが理想的か」について、これまで浦河の良い点悪い点、住み続けるか離れてみたいかなどを聞いてきたが、それらを踏まえて自分の理想的なまちについて聞き取りを行った。

「田舎がいいですね。時の流れがゆっくりに感じるし、都会に遊びに行く！って感覚のほうが楽しいから」(G さん)、「田舎の方がいいなって思うよ。都会は窮屈だってよく言うけど、まさにそんな感じ！浦河は疲れとか癒せる場所だと思うよ」(E さん)などの回答が得られた。田舎がいいという人は都会の喧騒の中に身を置きたくない様子で、「浦河のようなまち」と、自分の地元あるいはそれに近い雰囲気の中で暮らすのが理想的だということが分かった。都会が理想的という人は、その便利さから都会がいいと思っている。

また、「田舎過ぎず都会すぎない場所」という田舎と都会の中間地が理想という声もでている。両方の良いところを取ったようなまちで、騒がしくならない程度に店も遊ぶところも自然もある場所が理想であると言う。これは地元が好き嫌いに関係なく生活をしていくうえである程度コンビニや衣料専門店、家電店、本屋、ファミレスのような店は欲しいということだった。そのような意味では浦河は理想とは少し遠いまちである。

5-8 浦河の魅力

質問項目 8「地元の魅力はなにか」について、自然が豊かで人が温かいという回答が多くでた。他にも町並みがきれい、食べ物が美味しいなど、浦河の環境について魅力を感じている。また、馬関係の仕事をしている人にとっては恵まれた場所であり、日本各地、海外からも仕事をしに来ている。そのような人にとって浦河はとても魅力的な町であるという話も聞き取りの中で出た。

5-9 浦河における若者にとって魅力的な仕事

基本的に田舎は仕事がないと言われているが、浦河も例に漏れずそのように言われている町である。仕事がないと言われている町でも魅力的だと思える仕事はあるのか聞き取りを行った。いくつかあるが、役場、銀行、漁連（あるいは漁師）、農協、日赤などが挙げられた。「地元に残りたい組は役場、金融系の安定した職に就きたいと思う」(B さん)という回答を得られたが、やはり安定性を重視した仕事が挙げられ、人気であることが分かった。また、「何が魅力的な仕事かは人それぞれであり、たとえ待遇や労働環境が良いと言えなくてもそれが自分のやりたい仕事であるならそれはその人にとって魅力的な仕事」という言葉も頂いた。確かに客観的に見ると魅力的とは言えない仕事でも自分がやりがいを感じていれば外からの評価は気にならないものである。しかしやはり一般的に魅力的と言われる

仕事の存在は大切であると考えられる。地域活性化のために若者の力は欠かせない重要な要素となる。そのため若者に町に留まってもらわなければいけないが、まず必要なのは仕事である。若い人にこの町に住みたいと思わせるには、町の雰囲気や環境も大切だが、現実的に考えた時、仕事がなければ生活もしていけないので魅力的な仕事とそれに伴う雇用の創出は必要である。

5-10 小括

本章では、浦河に対する思いや印象などについて明らかにしてきた。

浦河の良い点悪い点について、良い点は自然や人の温かさであり、それが浦河の魅力でもあるということが分かった。悪い点は店がなく公共交通機関も少ないため不便であることが挙げられた。しかし多少不便は感じて、やはり環境も悪くなく親も友人もいる地元が好きで住み続けたいと思っている人も多いことも分かった。

一方でそのように温かい雰囲気だからこそ居づらい・戻りづらいという声もあり、良いと言われることも視点を変えてみると悪いように見えてしまうこともある。それはその人の考え方であるためどうしようもないものではあるが、それでも帰ってくるのは少なからず浦河に対し良さを感じているからだと考えられる。

魅力的な仕事に関しては役場や金融、農協など手堅い職業が挙げられた。やはり安定性や待遇は仕事を考える上で大切な要素であり、それらの条件を満たすような仕事が挙げられたように思う。また、浦河には日高振興局があるのにその名前が一回も出てこなかった。振興局は道職員なので必ずしも役場のように地域に根ざしたものではないが、浦河にずっといる振興局職員はたくさんいる。それでも今回の聞き取りにその名前が出てこなかったのは、身近な存在ではないのか、先述したものに比べて敷居が高いと感じるのか、定かではないが振興局で働くのは「町の外の人」という意識があるように思える。

第6章 仕事

今回聞き取りを行った人はそれぞれ異なった職業に就いている。そのため色々な話を聞くことができた。働き始めて4年ほどになるが、仕事のやりがいや転職などについてどのように思っているのか聞き取りを行った。なお、項目1「職業はなにか」については、第2章の「聞き取りに協力して頂いた方々の基本情報」に記しているため割愛する。質問項目は以下の通りである。

表 6-1 聞き取り調査における質問項目

項目	質問内容
1	職業はなにか
2	なぜ今の職業を選んだのか
3	今の仕事に対する満足度
4	今の仕事にやりがいはあるか
5	職場の人間関係についてはどう思うか
6	仕事に関して将来に向けて焦ったり不安に思うことはあるか
7	転職したいと思うか

出所：筆者作成

6-1 職業の選択

「運転が好きだから」(Dさん・運送業)、「地元で働きたかったから」(Fさん・販売員)など、今の仕事を選んだ理由は職業ごとに異なるが、公務員、金融、看護師を選んだ人達はやはり安定が理由であった。もちろんそれだけが理由ではないが、第一に考えるのはそこなのである。彼らのほとんどは実家暮らしであるため、今は大丈夫かもしれないが将来親が仕事を退職して収入が減ったら自分が養っていかななくてはならない可能性が十分ある。そのような色々な可能性を考えると、給料も良くて福利厚生もしっかりしていて潰れる心配のない安定した職業を選択するのは当然のことだと考えられる。

6-2 仕事に対する満足度

仕事に対する満足度は高いと言える結果ではなかった。「給料は良いけど仕事内容は嫌だ。ノルマがあるんだよね」(Bさん)、「満足してない。仕事内容や求められるものに納得いかない」(Fさん)など、満足度が低い理由は主に仕事内容にあることが分かった。特にノルマのある仕事は精神的にも体力的にも厳しいようである。他にも「(満足度は)60くらいですかね。町民の役にたてる！って実感できないのがマイナスですね。後は満足しているんですがね」(Gさん)という回答を得られた。Gさんも仕事内容に少し不満を持っているようだが先述したようなものではなく、自分が仕事に就いた目的を果たすことができ

ない、果たしているのかもしれないがそれを知る機会がないことに不満を抱いている。

また、時間外勤務や人間関係、仕事量に対する給料の少なさなど労働環境への不満も理由として挙げられている。聞き取りの中では満足度半分か満足していないという答えであった。

6-3 仕事のやりがい

項目4「今の仕事にやりがいはあるか」について、「お客様に感謝されたとき」(Bさん)、「お客様にちょっとした気遣いをありがとうと言ってもらえた時」など、客や社内の人に感謝される時がやりがいを感じる瞬間であるという回答が得られた。一方で明確なやりがいを感じられない回答も多く出た。「あるともないとも言えません。私の求めているやりがいではなかったかなとは思います」(Gさん)、「あるといえはある」(Cさん)など自分が求めている仕事ややりがいと、実際の仕事ややりがいの間にギャップが生じ、その結果、たとえ希望していた職業に就けても思っていたようなやりがいを感じる事ができないのだと考えられる。

6-4 職場の人間関係

とても良いから悪くないまで程度の差はあるが、ほとんどの人が職場の人間関係について好感を抱いていた。ただし、「叱り方とか改善の仕方とか教育など自分を含めスタッフ一同意識する必要はある」(Fさん)という指摘もあった。より良い関係を築いていくためには社員同士の意識や努力が不可欠であり、それは個人の力ではどうしようもないものであるため、職場内の共通認識が大切であると考えられる。

また、女社会に身を置くCさんは職場の人間関係について、悪いと答えている。女性社会、男性社会など特殊な人間関係においてはこれまでの伝統や習慣の色が強いため、改善は普通の会社よりも難しいと考えられる。

6-5 将来に向けた仕事に関する不安や焦り

仕事に対し、これから自分はちゃんとやっていけるだろうかという不安と、今後キャリアアップをしていく上で資格を取るための勉強や周りからの期待に応えられるだろうかという不安が挙げられた。

6-6 転職

項目7「転職したいと思うか」について、結果は大体半々となった。転職したい理由としては、「ノルマが大変だから」(Bさん)、「土日休みでノルマのない場所がいい」(Fさん)、「もっと楽で給料のいいところがいい」(Dさん)が挙げられた。働く条件が今の自分にとって好ましくないために転職をしたいという様子が見受けられる。

6-7 小括

職業を選択する際に最も重視されるのは安定性であり、自分なりの目的や理想を持って仕事をしていることが分かった。しかし仕事内容や労働環境など理想と現実の差に、仕事に対するやりがいを見失っているようであった。やりがいを感じる人は相手からの感謝や自分が役に立っているということは何らかの形で実感できているが、やりがいを見失う人はそのような機会に恵まれていないことが分かった。職場内の人間関係が上手くいかなくて仕事を辞める若者も多いが、聞き取りを行った人達はそれほど人間関係には悩んでおらず、むしろ良いと思っている人が多かった。ただし、より良い関係のために変えてかなければいけないこともあると指摘している。

第7章 余暇

浦河には若者が遊べるような場所がない。ファミレスはないしボーリング場やラウンドワンのような施設もカラオケチェーン店も（ただし個人経営のカラオケ店はある）、もちろんデパートやショッピングモールもない。しいて挙げるとすれば町営の総合体育館くらいである。小学生ならそこにプールも追加できる。それほど遊ぶところがないため、基本的には誰かの家に集まって遊ぶことが多かったが、社会人である今、どのように余暇を過ごしているのかについて聞き取りを行った。質問項目は以下の通りである。

表 7-1 聞き取り調査における質問項目

項目	質問内容
1	休みの日は何をして過ごしているか
2	休みの日は誰と一緒にいることが多いか
3	休みを過ごす上で今生活しているところに不満はあるか

出所：筆者作成

7-1 休日の過ごし方

休日の過ごし方は友達と遊んだり、旅行したり、家でゆっくりすることが多いようである。過ごし方としては田舎・都会に関係なくどこにでもある過ごし方であるが、行く所がないため一緒にどこかに遊びに行くというよりは、集まってご飯を食べたり飲みに行ったりすることの方が多いと分かった。そのため休日に一緒に過ごすのは友達や職場の人が多し。また、家でゆっくりすることもよくあるので、家族あるいは1人という場合もある。

7-2 休みを過ごす上での不満

「やることできることが限られるので増やしたい。友達といても麻雀したり風呂行ったりばかり！」(Fさん)、「運動する場所がないし、ゲーセンとか、どっか集まってご飯とか行くところがない。買い物するにも店がない」(Dさん)などの回答から、やはり遊ぶところがないことに対する不満はほとんどの人から出た。小学生の時は校庭や公園で遊び、中学生は家や総合体育館で遊ぶ。高校生あたりから段々と今までのパターンに飽きてきて、しかしながら遊びに行く所もないので困り始めるのである。Bさんは「私らはまだ車あるからどこでも行けるけど学生が可哀想だよ」と述べている。その上で「だから結局若い親が増えてしまう」とも述べており、実際筆者の同級生にも何人かすでに子どもがいる人や離婚した人もいる。それらが悪いという訳ではなく、早くに結婚・出産をしてすぐに別れることも多いので、母親の実家に暮らしているとはいえ子どもにとって良い環境にいるとは言えない場合もある。もちろん幸せな家庭を築いている人もたくさんいるが、必ずしもそうではない人もいるのが現状である。ちなみに現在札幌在住のHさんは不満はないとの

回答だった。

7-3 小括

休日は遊ぶ時には友達や職場の人と集まる場合が多いが、やることもできることも限られてしまう上に、ずっと暮らしていれば町でできることも飽きてしまうため、遊べる場所に対する思いは強い。せめて集まれるような場所だけでもできることを望んでいる。

「遊ぶところがないから若い親も増える」という発言もあるが、それがすべてとは言えないにせよ一因としては考えられる。それ自体が悪いのではなくお互いきちんと責任を持って、将来についても考えているのであれば問題はない。

第8章 その他

これまでは聞き取りを行った人の家庭環境や友人関係、仕事などについて聞いてきたが、本章ではその人自身について聞き取りを行った。これまでの質問を踏まえ、現在や将来について考えて頂いた。

表 8-1 聞き取り調査における質問項目

項目	質問内容
1	将来に対する不安や焦りはあるか
2	10年後の自分はどうなっていると思うか
3	自分に自信がある方かいない方か
4	現在の生活の満足度

出所：筆者作成

8-1 将来に対する不安や焦り

将来に対する不安や焦りは本当に人それぞれであった。「子どもの将来が心配。いじめられないか、勉強ちゃんとできるか、なにより病気にならないか」(Aさん)、「どうなるんだろうという漠然とした不安」(Cさん)、「将来への焦り。今の職場は婚期が遅れるらしい」(Dさん)、「実家暮らしで家事をすることがないので自立できないと思うこと」(Fさん)、「社会人になってからの自分がまったく想像つかない」(Hさん)という回答がえられた。具体的な不安や焦りはA・D・Fさんが答えているが、いずれの回答も比較的直近の将来について考えていることが分かった。確かにこれよりもっと先の将来になると漠然なものになってしまうのかもしれないが、筆者の予想では親の介護などの回答もでると思っていたため少し予想外ではあった。今その答えが出てこないということは親は健康でいるということだが、今後必ず直面するので早くから考えておくべき問題だと思う。

また、一方で「なるようになる」という前向きな回答もでており、自分の好きなように今を生きるしかないと述べている。

8-2 10年後の自分

項目2「10年後の自分はどうなっていると思うか」について、冷静に自分を見ている回答とこうなっていたらいいなという理想を反映した回答が得られた。「音楽はやってる。結婚とかはしてないと思う」(Fさん)、「いつか転職してやる！とか思いながらダラダラ今の仕事続けてそう」(Bさん)と、現在の自分の状況を踏まえ、あまり大きな変化は見られないという見方であった。「仕事バリバリこなし、結婚して子どもいて幸せ」(Cさん)、「主婦になってやりたいことやってるかなあと思いますね」(Gさん)このような回答からは、自分の今の状況を踏まえてというよりは、「こうなっていたい」という願望が見られる。自分の理想の将来は人それぞれであるが、1つの大きな理想として「家庭を持つ」ことがあると

2 人の回答から分かった。C さんも G さんも女性であるため特に結婚願望は強いのかもしれないが、これまでの聞き取りから将来に対する不安として「今の職場だと婚期が遅れるらしい」、「結婚できないかも！！」という声も出ている。今は考えていなくても、男性も女性も将来的に結婚については前向きに考えていることが分かった。

8-3 自分への自信の有無

自分への自信の有無を聞いたところ、全員が「ない」と答えた。理由は「自信になるような特技も資格もない」(H さん)、「仕事できないし頭悪いから」(C さん)、「なにができるってことがまずないから」(A さん)と、自信を持てる根拠がないようであった。日本人の性格上他人から見れば誇れるようなものをもつ人でも「自分は自信がない」と答える人が多いだろう。今回の聞き取りでは人に自慢できる特技やできないことがないために自信がないと答えていたが、たとえできないことがなくてもその人の内面であったり人との接し方であったり、他の人から見れば自信に繋がるような要素はそれぞれたくさん持っている。しかしそれに気付かず「自信がない」と言っている人が多いのではないだろうか。自信がないから自信を持てるように努力するという謙虚さは時には必要なことかもしれないが、自分を卑下してみる必要はないし、客観的に見たその人の魅力に気付かせる機会をもっと設けられるべきであると考えます。

8-4 現在の生活の満足度

満足と答えた人は、「結構満足。実家に帰りたいたときに帰れるし(町内で一人暮らししている)、友達もいるし」(C さん)友人や家族との関係も良く、実家暮らしのため家事をしなくていいので楽であるということから、生活の満足度は高い。ただし「仕事を考えなければ」という条件を付ける人もいた。一方で満足していない人もいる。1 人は「10%くらい。ただ生きているって感じの毎日。仕事行く、風呂入る、ご飯を食べる、寝る、仕事の繰り返し」と答えている。毎日同じ繰り返しの中で特に変化もなく日々の生活を送ることに飽き、楽しさを見出せない様子であった。彼は自分の人間関係には不満はないものの、仕事や浦河そのものに対してはどちらかというと否定的であり、現在の生活の満足度が高いとは言えないのも分かるような状態であった。町外に出てみたいとも言っている。また別の人は、3 世帯で住んでいるため、不便が多く大変だと言っている。「家事はもう不便！料理するにもみんな一斉にするし、洗濯機も風呂も順番！」食事はみんなで集まってするのではなく各世帯でするためキッチンは込み合い、洗濯も風呂ももちろん順番、早い者勝ちである。彼女は人間関係も仕事も浦河に対しても満足しており、聞き取りを通して浦河が好きだということが分かった。しかしそれらとは関係なしに生活においては不便・不満を感じている。

8-5 小括

将来の不安は人それぞれであり、子どもの将来や結婚に対して、実家暮らし故に自立ができない（家事ができない）などの具体的な不安から、どうなるのだろうという漠然とした不安まで様々であった。いずれも直近の未来の不安であり、もっと先の将来に向けられた不安や焦りは出てこなかった。現在の生活に対する満足度も高い人と低い人がいて、将来の不安も現在の満足度も人間関係や仕事とは必ずしも関係がある訳ではないことが分かった。家族関係も友人関係も仕事も良好であってもそれらが満足度に反映されるとは限らず、逆に不満があったからといってその人の置かれている環境が悪いとも言えない場合がある。何を以って満足・不満とするかは人それぞれで、それは直接本人に聞いてみないとその人の状況を考えて推察するだけ分からないことが分かった。

また、全員が自分に自信がないと答え、自分に対しネガティブに考えていた。日本人の性質として自分を良く言うことは憚られ、良い意味では謙虚とも言えるかもしれないが、下に見る必要はない。自分の知らざる魅力を知る機会がもっと設けられることが望まれる。

第9章 まとめ

本論文は、浦河町の若者を対象にした聞き取りを中心に地方の若者について様々な視点から考察してきた。

第1章では現代の若者論として「さとり世代」と「マイルドヤンキー」について述べてきた。さとり世代と呼ばれる若者達は一般的な娯楽や嗜好にあまり興味を示さず、上昇志向もなく、周りの空気を読んで周囲の上手く溶け込みながら、ほどほどに良い生活を営むことを目指している。一方マイルドヤンキーと呼ばれる若者も同じく上昇志向はあまりないものの、娯楽に対してはお金をつぎ込み、結婚も比較的早く、なにより特徴的なのは地元を出たがらないことである。都会に出て競争社会に身を投じるよりもあえて地元に残った方がリスクが少ないと考えている。このような世代の若者は生まれた時から不況を生きてきた。そのため安定志向が高まり、この先どうなるか分からない社会において少しでもリスクを抱えないようにしたいと考えているのではないだろうか。多くの大人に「最近の若者は元気がない」と思われるのもそこに原因があると考えられる。昔は都会にでて「ビッグなやつになりたい」、「たくさん稼いで良い生活がしたい」など都会に対する憧れや、お金や高い地位が目標としてあった。しかし最近の若者は必ずしもお金や地位が目指すところではなくなっている。その目標は人それぞれであり、彼らはそれを達成するために働いている。大人の言う上昇志向が高い地位やお金を稼ぐことであるなら確かに元気がないように見えるかもしれないが、彼らは彼らなりの目標を持ち、様々なことを考えたうえで目標を達成すべく働いている。一世代前の大人と現在の若者の考え方のギャップがこのようなすれ違いを生んでいるのである。

また「マイルドヤンキー」と呼ばれる地元に残る若者も増えているが、その理由としては第1章でも述べているようにリスクが少ないのである。仕事、結婚、人間関係、生活など、多少の不便さはあるが、都会に出てこれら全てを一から築き上げるよりは地元の慣れ親しんだ中にいた方がずっと楽だと考えるのは誰しもが思うことである。また、地方にいても都会と同じようなライフスタイルを送れるようになったことでわざわざ地元に離れる必要性がなくなってきた。しかし若者が地元に残る理由は他にもあるのではないだろうか。1-1-4においてマイルドヤンキーは地元活性化のための有力な担い手になり得ることについて触れた。彼らにもっと地域を活性化してもらおうとご当地アイドルや地元志向の商品を開発している。また結婚が早くそれに伴う出費や車などの趣味にもお金をかけるため、消費者としてもとても期待されている。彼らは地元にとって残ってもらいたい存在なのである。さらに、3-4では、親は子どもが地元に残ることに対して歓迎することはあっても反対することはないことが分かった。若者にとって残りやすい環境が整っていることも地元に残るという選択を後押ししているのだと考えられる。

聞き取り調査では8人の浦河出身者（うち7人は現在浦河で就職）に話を聞いた。彼らはずっと浦河で暮らしていて、高校卒業後も浦河で就職している。聞き取りを行った結果、

彼らの考え方は「マイルドヤンキー」の考え方に近いという風を感じた。慣れ親しんだ地元で就職して親と昔からの友人と一緒に暮らすことに満足感を感じている。都会への憧れはあるものの、都会にあるお店や施設、交通網に対する羨望でありそこに住んでみたいというようなものではなかった。むしろたとえ転職しても浦河がいいという人もいた。また、全員が勉強や仕事、得意なことなど「自分は何もできないことがない」と自信を持てていなかったが、そのような自分に対する劣等感が更に都会への距離を生んでいるように思う。都会での仕事や暮らしは確かに便利で田舎に比べたら華やかなものになるが、その分仕事に対する高い資質や能力などを求められる場合も多い。そのため自分に自信のない彼らは「都会に出て…」という思いを感じてしまい、町の外へ出るという選択肢を消してしまうのではないだろうか。だからこそ冷静に自分の現状と社会の状況を分析し、あえて都会にでることはせず地元で安定した生活を送ることを選んだ。社会に立ち向かうのではなくその状況に上手く順応することで安定を手に入れる彼らの戦略である。

聞き取りから見えてきた実態が、今の地方における若者の実態でもある。どちらかと言えばマイルドヤンキーの特色が強いように思えるが、マイルドヤンキーは地元志向であり、地縁を重要視する傾向がある。その点においては「さとり世代」とは異なる点であり大きな違いと言える。そのためマイルドヤンキーはより人の繋がり強い地方の方が、さとり世代は全てではないにしろ都会の方が適合的であると考えられる。地方における若者が地元に残るのは、自分の仕事や生活、結婚を考えた時、今の社会を生きていくための彼らの知恵である。地元に残りやすい環境と彼らの知恵が合わさった結果、彼らは地元に残ることを選び、彼らの選択は今の不安定な社会を生きるうえでよりリスクを抱えない賢い選択ともいえる。しかしだからといって問題がない訳ではない。将来、親が年を取って働けなくなった時、現在親にパラサイト（寄生）している若者はどうするのか考えなければならない。

本論文を通して、地方に留まる若者は現実的な状況分析のもと、残っていることが分かった。大人に色々言われる中冷静に判断をしていたのである。現状に上手く順応する技を身に着けることで、厳しい社会の中でも安定した生活を得られるようにしていた。しかし地元に残るということは自らの可能性も狭めてしまうことにも繋がる。地元を選ぶことで将来有望な若者が潰れないように、若者の力を活かせるような機会を設けることが今後必要なことだと考える。また、日本の景気が停滞している今、彼らのような存在は地域活性化ひいては日本活性化の有力な担い手である。今後の課題の1つは雇用の創生、住居の整備、各施設、店舗の整備などより若者に残ってもらうためのまちづくりであろう。筆者の地元である浦河町も決して賑わっているとは言えない町であるが、もっと町が元気になるように彼らのような若者が中心となって積極的に町の活性化を図ることを願う。

おわりに

田舎である地元に残る同級生を疑問に思っていたことがきっかけで本論文を書き始めた。聞き取り前は正直、経済的・学力的な問題から町に留まっているのだと思っていたが、話を聞くうちにそのようなネガティブな理由で残っているのではなく、町の良い所も悪い所も見つめた上できちんと考えを持っていることが分かった。私は早々と高校進学から町を離れ、地元に対する印象もそれほど良いものでもなかった。しかし思ってもみなかったような町や家族に対する思いを聞いて、自分ももっと地元についてちゃんと考えればこのように良くない印象を抱くこともなかったように思う。特に町の良い所や魅力を聞いた時には、考えもつかなかったような回答がたくさん出てきた。聞き取りが終わった後、自分の町について全然知らないことに驚き、とても自分が情けなく感じた。将来のために高校から地元を出たことに後悔はしていないが、何もないから出るのではなくそこを元気にしようという考えがなかったことに、もしその思いが少しでもあればこの1年間の就活の意識も少し変わったのだろうかと思う。自分と同世代の人が町のため家族のために頑張っている姿にとっても刺激を受けた。私も一度町をしっかりと見直し、家族についても考え、仕事に対する思いを見つめ直そうと思えた。

興味本位から始まった論文ではあるが、今の若者の実態について知り、自分の町についても考え直す良い機会となった。地方へともるそもそもの原因は日本の不景気にあるが、そんな社会の中を逞しく生き、むしろ日本活性化の一端担う存在になり得る可能性を見ることができた。同じ同世代の若者として決して他人事ではない話である。将来をしっかりと見据え、不景気の中でも生き残っていけるように一から自分を考え直す必要性を感じる。教育大学にも地方から進学してきた人は多い。自分の地元について改めて考えるきっかけとしてこの論文が少しでも役に立てばいいと思う。

謝辞

本論文を作成するにあたり、調査にご協力して頂いた皆様に深く感謝を申し上げます。皆様に調査に協力して頂いたおかげで、研究を深めることができました。また、角一典先生には、大変お忙しい中、最後まで本当にご迷惑をおかけしました。それでも見捨てず熱心に指導して頂いたことに心より感謝申し上げます。

また、本論文には私的解釈、見解が含まれていることをご了承頂ければと思います。

本論文が無事に完成できたのは多くの方々のお力添えのおかげです。ありがとうございました。

参考文献

- ・阿部真大, 2011, 『居場所の社会学 生きづらさを超えて』 日本経済新聞出版社.
- ・阿部真大, 2013, 『地方にこもる若者たち 都会と田舎の間に出現した新しい社会』 朝日新聞出版.
- ・宮台真司, 1995, 『終わりなき日常を生きて』 筑摩書房.
- ・久木元真吾, 2003, 「やりたいこと」という理論『ソシオロジ』 48(2):73-89.
- ・辻大介, 2004, 「若者の親子・友人関係とアイデンティティ」『社会学部紀要』38(2):147-159.
- ・新谷周平, 2002, 「ストリートダンスからフリーターへ」『教育社会学研究』 71:151-168.
- ・朝日新聞, 2013/12/29, 「本社世論調査「20代はいま」」.

参照 HP

- ・excite.ニュース HP
http://www.excite.co.jp/News/column_g/20141112/Nanapi_00007422.html
- ・デイトピ.jp HP
<http://dailytopic.jp/2412.html>
- ・TKC グループ HP 戦略経営者
http://www.tkc.jp/cc/senkei/201411_interview
- ・北海道浦河高等学校 HP
http://www.urakawa.hokkaido-c.ed.jp/?page_id=137
- ・NHK ONLINE HP
<http://www.nhk.or.jp/fukayomi/maru/2014/140531.html#>
- ・innova.incHP
<http://innova-jp.com/201512-satori-generation-1st/>
- ・新刊 JP ニュース HP
http://www.sinkan.jp/news/index_4404.html
- ・ニッポンのジレンマ HP
<http://dilemmaplus.nhk-book.co.jp/think/6073>
- ・営業 type HP
<http://sales.typemag.jp/article/1909>
- ・ダ・ヴィンチニュース HP
<http://ddnavi.com/news/168077/a/>
- ・マイナビ HP
http://www.mynavi.jp/news/2015/04/post_8717.html

・ レジエンダ HP

<http://www.leggenda.co.jp/news/press/20140508-01.html>

・ 東洋経済 ONLINE HP

<http://toyokeizai.net/articles/-/43668>

・ 株式会社電通 HP

<http://www.dentsu.co.jp/news/release/2015/0420-004029.html>

・ ソニー損保 HP

http://from.sonysonpo.co.jp/topics/pr/2016/01/20160105_01.html

・ じゃらんリサーチセンターHP

<http://jrc.jalan.net/j/surveys.html>

・ 酒文化研究所 HP

<http://www.sakebunka.co.jp/archive/letter/index.html>